

Information & HIROBA

各地の活動レポート

●歌でつながる安全と思いやり

昨年、「小さな親切」実行章を受章した「いつか&奈良ひより」さん姉妹（秋田県鹿角市）は、交通事故を減らしたいとの思いから、クラウドファンディングで資金を集め、交通



いつもありがとう（秋田県本部 主幹副代表が贈呈式を開催）

あった個人や団体を表彰する「長崎市表彰」を受け、中牟田真一代表が表彰式に出席しました。同支部は毎年、親切な方を表彰する「小さな親

お正月二景

●「はっけよいのこった」

青森県では、冬場の運動不足を解消するスポーツとして親しまれているねまり相撲（すわり相撲）。「ねま



元旦からいい汗かいた

る」とは、東北地方で「すわる」の意味で、毎年市と弘前支部（代表：須藤悟）が大会を共催しています。43回目となる今年元旦には、市内の8小学校より児童110名が参加し、熱戦が繰り広げられました。

ねまり相撲大会の目的は、子どもたちの友情を育んでもらうこと。スポーツを通し、心身を鍛えた子どもたちの健やかな成長が期待されます。

●カルタとり

特任推進委員・田子育良さん（福島県）は1月5日（日）、昨年に引き続き「小さな親切」運動カルタ大会を開催しました。親切をテーマにしたカルタは、楽しく思いやりの心を育ててほしいと田子さんが作製したオリジナル。新年早々、札を競う子どもたちの元気な声が響きました。



目標たくさん達成するぞ

今年は、地域の書き初め大会と共催し、田子さん手作りのカードに、子どもたちの今年の目標を書いてもらいました。さて、目標達成はいかに。子どもたちの夢や目標が一つでも多く叶うことを願っています。

安全を呼びかける楽曲を制作。CDは警察署を通じ、地域の幼稚園・学校などへ配布されました。実行章推薦者の「わかば保育園」の保育士・工藤優子さんは、この曲を園児が道路を渡るときに一緒に歌い、交通安全に役立てています。今年1月、今度は交通指導を続ける工

藤さんと、明るい職場づくりに貢献したとして、同保育園の事務・黒澤明子さんが実行章をW受賞。日頃の感謝を込めて、園児たちから賞状が手渡されました。

●長崎市から表彰を受ける

4月1日（水）、長崎支部（事務局：浜屋百貨店）が、市政に功労の



賞状を受け取る中牟田代表（右）

切」実行章の贈呈式を開催し、全国でも唯一、受章者による活動発表を行うなど、市民の思いやりの心を育てる活動が評価されました。

●寄附金ご芳名

（2020年1月～3月末／敬称略・順不同）

山口県 福増満／株式会社山口ファイナンシャル・グループ／広島県 藤

原紀男／大分県 山本金次郎／神奈川県 風間信夫

おとなの作文

「エスコート」

奈良県 武田亜沙美

仕事が終わりと、大阪から満員電車で1時間揺られて、くたくたになって自宅の最寄り駅（大和西大寺駅）に到着する。夕方から夜にかけては特に混み、あらゆる方面に頻繁に電車が往来する。広くはないホームには、人があふれている時間帯だ。

その日もいつものように、疲れてぼんやりとした頭で、足元を見ながら電車を降りた。ふと顔を上げると、目の前によろけて線路に落ちそうな年配の男性がいた。通りすがりの女性がとっさに支えた。男性は、サングラスをかけて白杖をついている。目が見えない、ということはすぐにわかった。

私は反射的に、彼の白杖を持たない方の手を取った。騒がしいホームの中、やや大きい声で「どちらに行かれますか」と聞くと、榎原神宮行きに乗りたいと言う。その方面のホームへは、いったん階段を上り、通路を抜けて、階段を降りなければならない。「一緒にします」と私は言って、彼の手を取り一歩前を歩きはじめた。

私は、榎原神宮行の電車に乗ったことがない。電光掲示板を確認すると、あと二分ほどで発車することがわかった。「もうすぐ発車してしまいます。急ぎますか。」と尋ねると、「はい。もっと速くても大丈夫です。」と、彼ははっきりと答えた。

私は彼の手を強めに握り、足を速めた。人波を縫って行く。そのスピードについてきてくれる。「もっと速くても大丈夫です」と再び彼が言ったので、さらにスピードを上げた。階段の手前で「階段を降りますよ」と声をかけ、一段目はゆっくりと降りる。彼の足取りはしっかりしていて、私たちは一気に階段を駆け下りた。

ホームにはすでに榎原神宮行の電車が着いており、ドアが開いている。私は「乗りますよ。足元に気をつけて。」と彼を電車に乗せ、そっと手を離した。すぐにドアが閉まり、ゆるやかに動き出す電車を見送った。

つないでいた手を見ると、少し震えていた。彼を転ばせることなく、電車へと送り届けられたことに安堵した。彼が無事、目的地で降りられることを祈った。

階段を駆け下りるさまを思い返した。手を引く私と彼の確かな足取りは、まるで映画のワンシーンのようだった。そこには、ラララララ～、と歌うような軽やかさがあった。

初めて会った相手と手をつないで階段を降りることなどないので、不思議だった。

いつもうなだれてよろよろ歩く自分が、偶然顔を上げただけで彼に気づき、役に立てたことが嬉しかった。当たり前だが、人は助け合って生きてゆくのだな、という実感がじわじわと湧いてきた。

仕事帰りはたいてい疲れ果てているが、余裕があるときは、なるべく前を向いていようと思いながら、私はいつもの出口を目指して歩いた。

